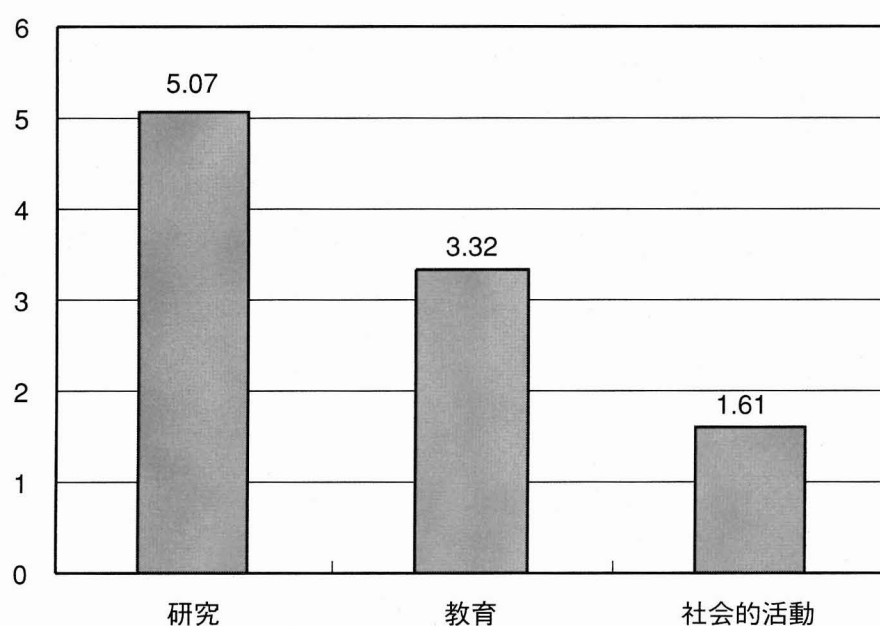


第 1 部 調査の統計データ

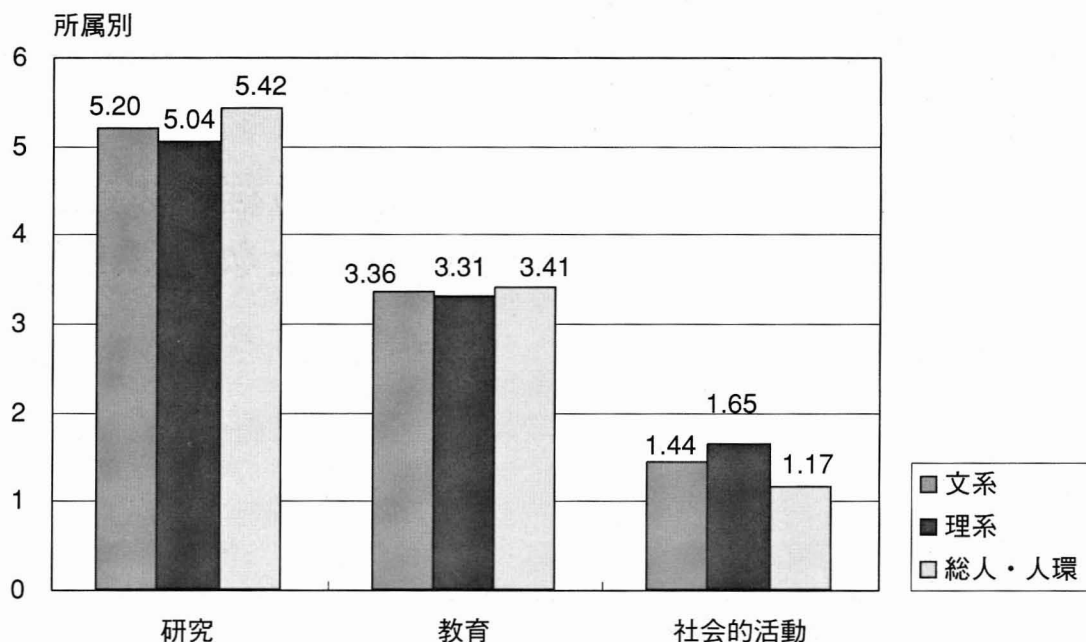
(1) 教育への関心について

① 研究、教育、社会的活動の比重

研究 5 割、教育 3 割、社会的活動 2 割



大学教官の主要な仕事を「研究」「教育」「社会的活動」の3つに敢えて振り分けた場合の比重を聞いたところ研究が約5割、教育3割、社会的活動2割となった。この質問については、医学研究科等の先生から医療活動の位置付けの仕方（社会的活動ではあるが、研究でもあり、教育でもあるので分類が難しい）に関してご指摘をいただいた。



教官の所属を3つに分類（文系、理系、総人・人環）して見てみると、理系と総人・人環が顕著な違いを示している。相対的に、理系が「社会的活動」を重視している（1.65）のにたいし、総人・人環は「研究」（5.42）を重視している。文系は両者の中間的傾向を示す。ただしこれを仕事の実際的な優先度とみなすか、あるいは理念的な重要度とみなすかは、解釈の余地がある。

所属部局の分類については以下のとおり（回答者のいる部局のみ）。

「文系」：文学研究科、教育学研究科、法学研究科、経済学研究科、人文科学研究科、経済学研究科。

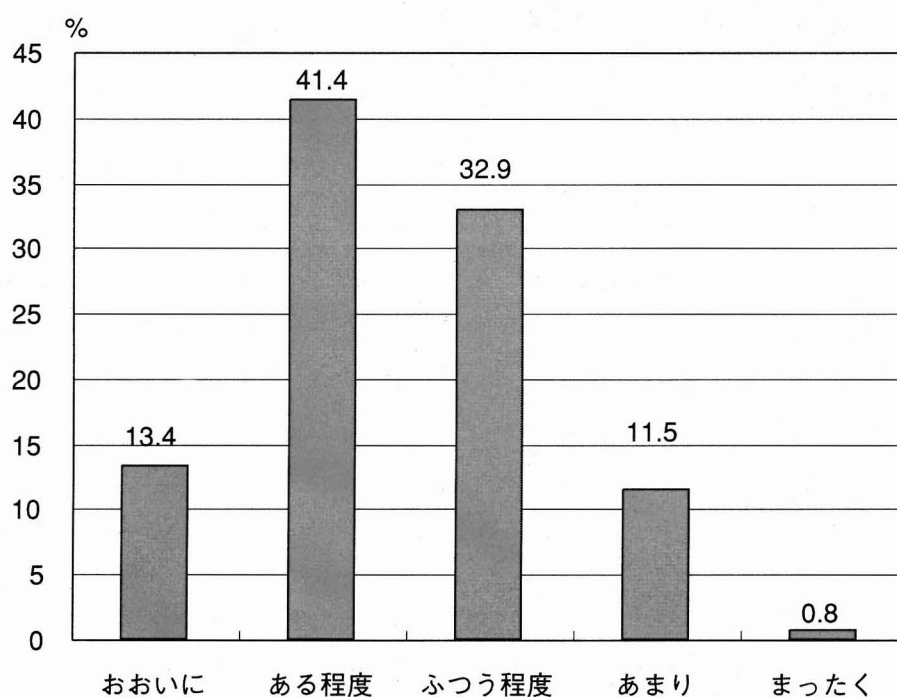
「理系」：理学研究科、医学研究科、附属病院、薬学研究科、工学研究科、農学研究科、エネルギー科学研究科、化学研究所、再生医科学研究科、エネルギー理工学研究所、木質科学研究科、食糧科学研究科、防災研究所、基礎物理学研究所、ウイルス研究所、数理解析研究所、原子炉実験所、霊長類研究所、大型計算機センター、放射性同位元素総合センター、放射線生物研究センター、超高層電波研究センター、生態学研究センター、総合情報メディアセンター、情報学研究科。

「総人・人環」：総合人間学部、人間・環境学研究科。

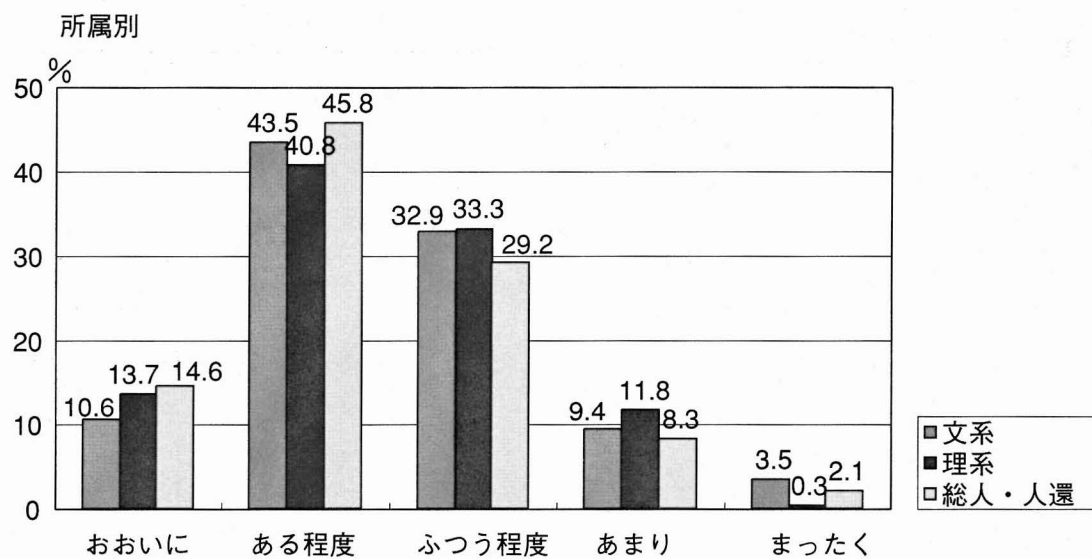
なお、次の部局については分類が困難なため所属別データからは除いた。東南アジア研究センター、体育指導センター、留学生センター、総合博物館。

② 教授法の工夫

教授法の工夫に時間・エネルギーをある程度以上充てている教官は半数を越え、普通程度以上ならば9割。



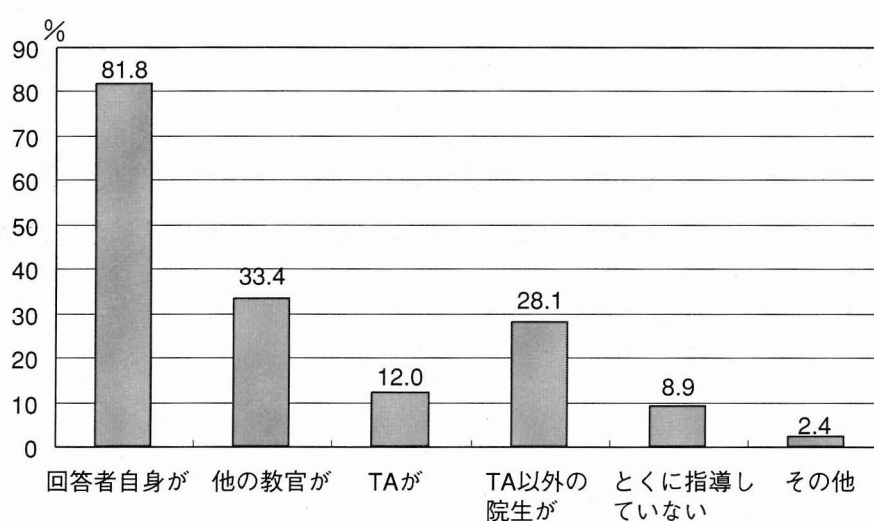
教授法の工夫にどの程度の時間やエネルギーを充てているか、を聞いたところ、ある程度以上充てているとされた教官が54.8%、普通程度充てていると応えた教官を含めると87.7%の教官が教授法の工夫に取り組んでいる。京大の教官は教育に熱心ではない、というのは的を射た指摘とは言えないようである。



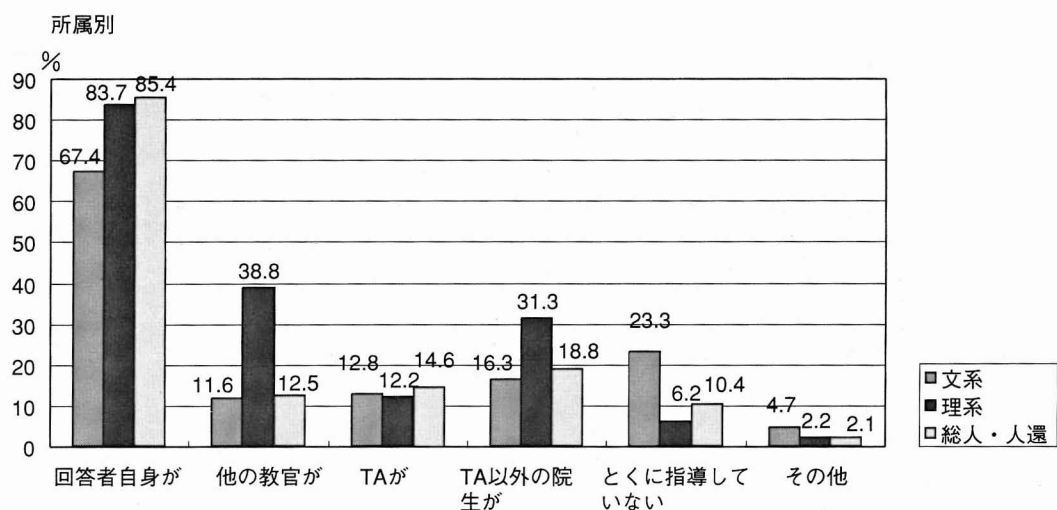
「ある程度」以上充てているとの積極的回答は、文系（54.1%）理系（54.5%）にくらべ、総人・人環（60.4%）に多い。ただし「ふつう程度」も含めるとその差は消えてしまう（87.0%、87.8%、89.6%）。

③ だれが学生に基礎的指導をするのか

教官自身がしているのが 8 割



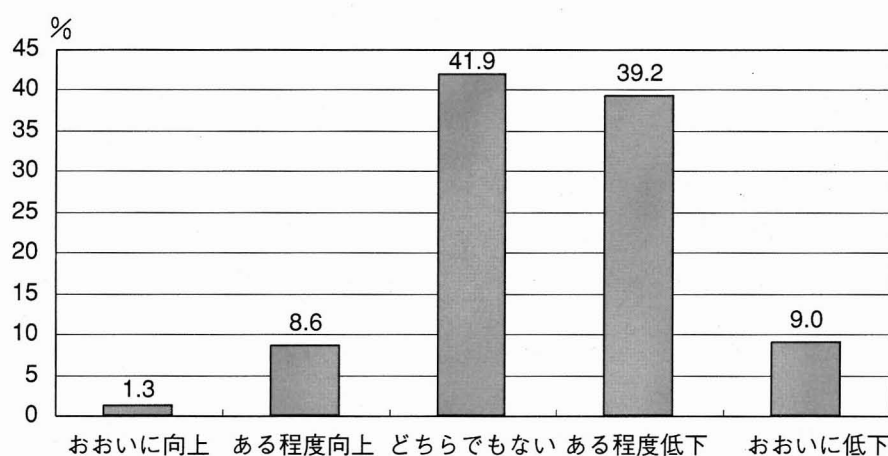
文献検索、調査、実験などの基礎となる技術を誰が指導しているか聞いたところ、自身がされているのが81.8%であった。大学院重点化の進行に伴う助手定員の振り分け、TA制度の普及が十分ではないこと等により、基礎技術指導を自らせざるを得ない現状が窺える。もちろん、これには右頁のとおり、所属による違いがある。



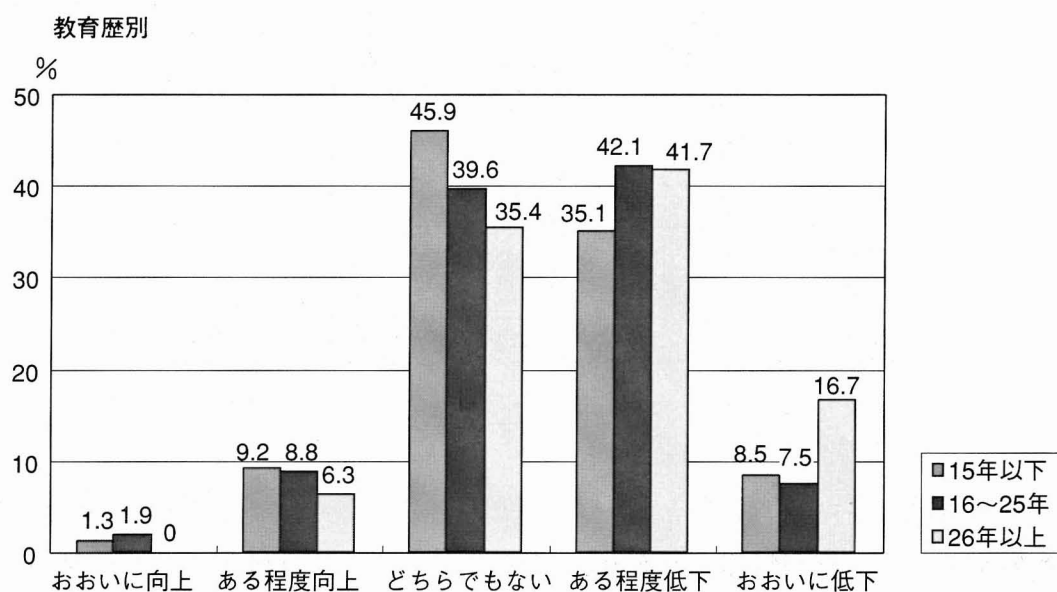
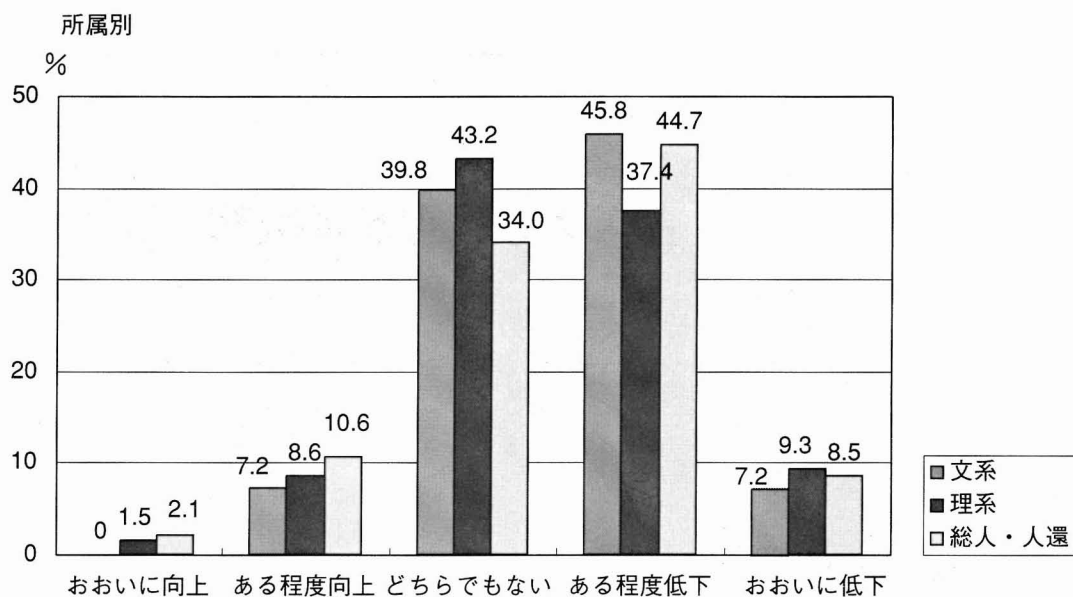
文系では、「回答者自身」(67.4%)が少なく「とくに指導していない」(23.3%)が多い。理系では、「回答者自身」(83.7%)だけでなく「他の教官」(38.8%)「TA以外の院生」(31.3%)など総出で指導している。文字どおり「回答者自身」が指導する傾向にあるのは、総人・人環(85.4%)である。

④ 学生の基礎学力

低下していると考えている教官が 5 割弱



学内でよく話題にされる学生の基礎学力の低下の問題について、以前と比べてどう変化したかを聞いたところ、「おおいに」もしくは「ある程度」低下したと考えている教官が48.2%であり、向上したとされる教官は9.9%しかいなかった。但し、この質問には、ゼミ等で接する「身近」な学生と全学共通科目の大教室で接する学生との違いを指摘され、後者についての「低下」を批判する教官が少なからずおられた。因に、白石データでは「おおいに」もしくは「ある程度」低下したと考えている教官は39.7%であり、向上したとされる教官は17.6%であった。いずれの数字とも学生の基礎学力問題の深刻化を表わしているようである。

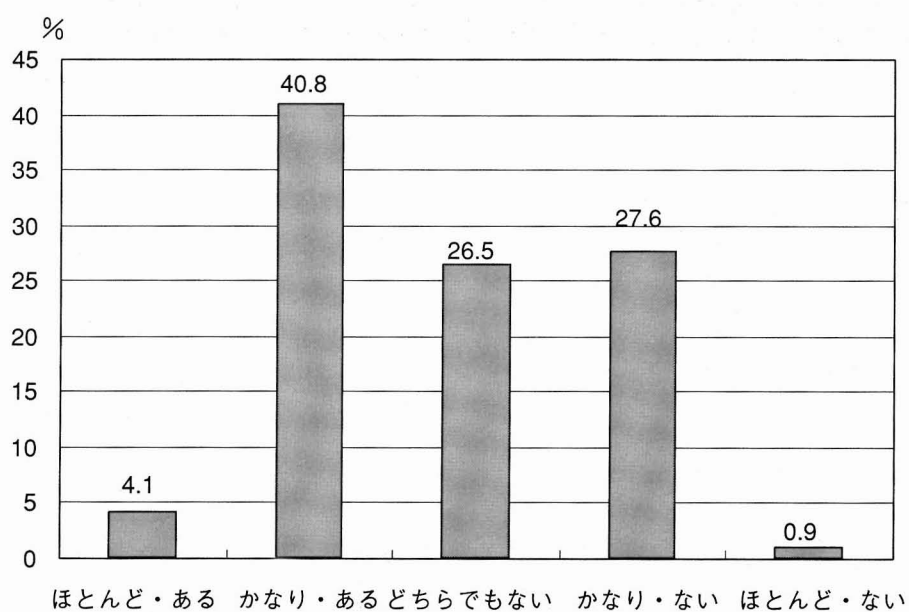


「ある程度」または「おおいに」低下したとの回答は、理系（46.7%）よりも文系（53.0%）総人・人環（53.2%）が多い。

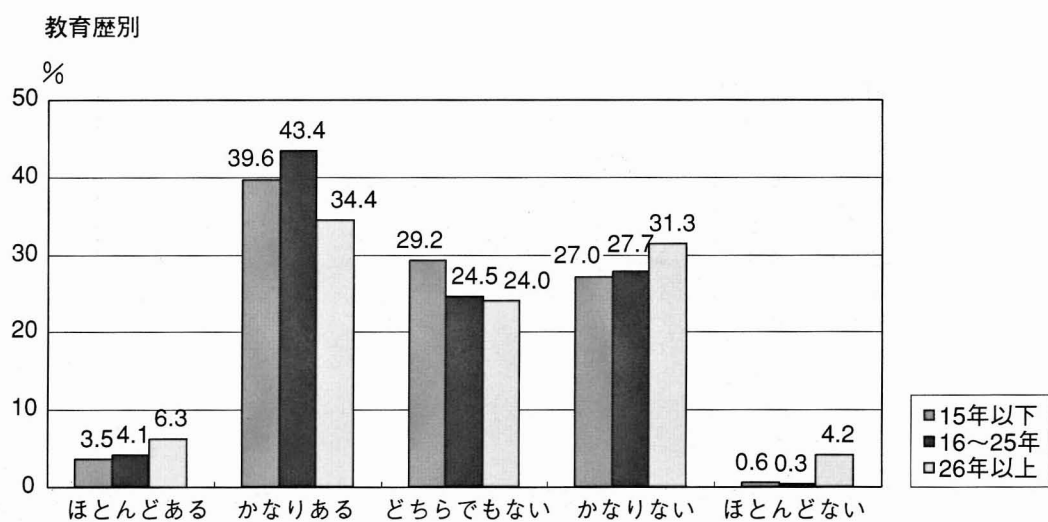
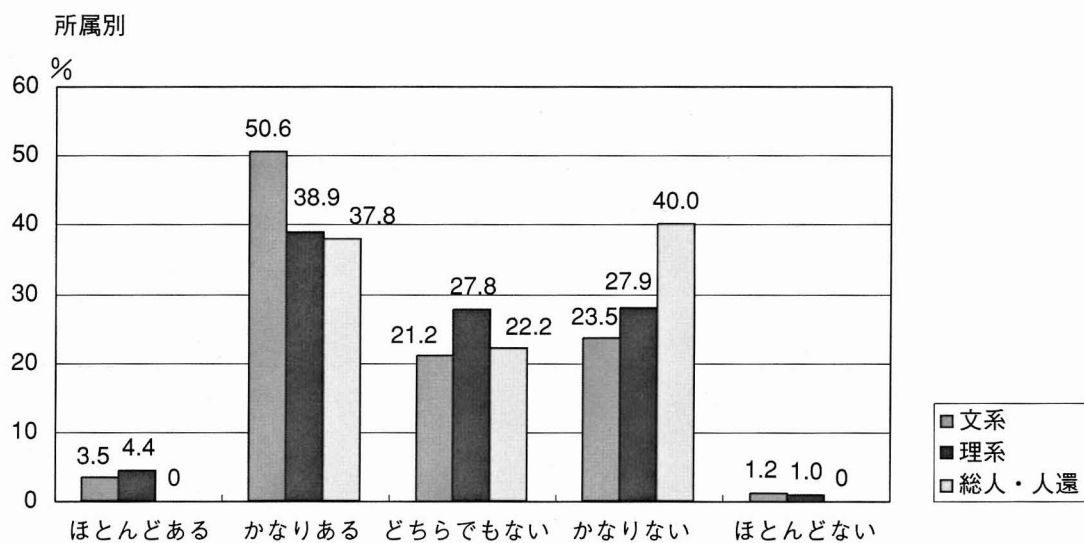
なお、これについては教官の教育歴でも顕著な違いがみられる。「ある程度」または「おおいに」低下したとの回答は、15年以下（43.6%）16－25年（49.6%）26年以上（58.4%）と教育年数に比例して多くなる。

⑤ 学生の学習意欲

「ある」と考える教官が半数弱



学生の学習意欲について聞いたところ、「ほとんど」もしくは「かなり」の学生に意欲があると考えている教官が44.9%であり、「かなり」もしくは「ほとんど」の学生に意欲が無いと考えている教官が28.5%であった。白石データでは前者が54.9%、後者が27.6%であり、学生の学習意欲低下の進行が若干見て取れる。

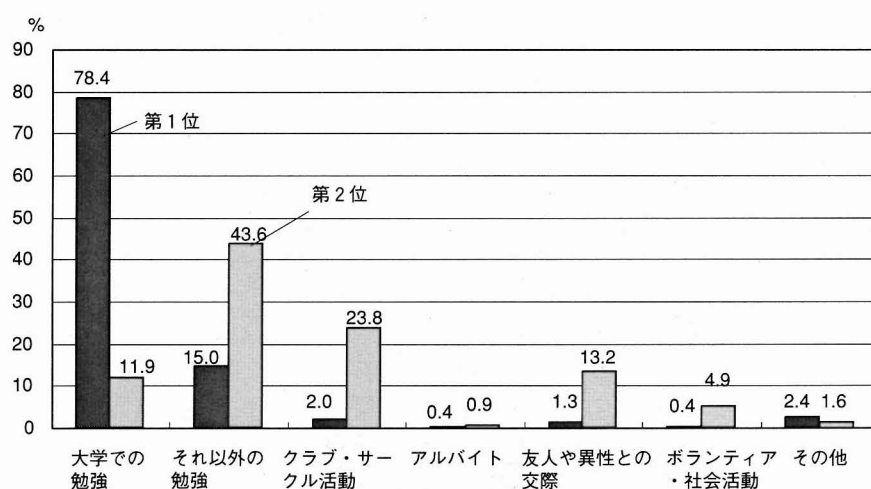


文系では、「意欲がある」(54.1%)が多く「意欲がない」(24.7%)が少ない。逆に、総人・人環では、「意欲がある」(37.8%)が少なく「意欲がない」(40.0%)が多い。理系は両者の中間的傾向を示す(43.3%、28.9%)。

教官の教育歴で見ると、「意欲がない」との回答は、15年以下(27.6%) 16-25年(28.0%) 26年以上(35.5%)とやはり教育年数に比例して多くなる。

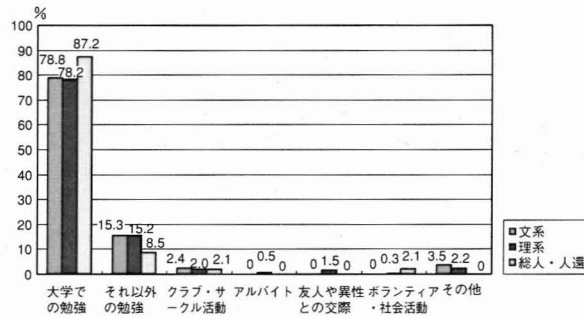
⑥ 学生にとって重要なもの

やはり勉強

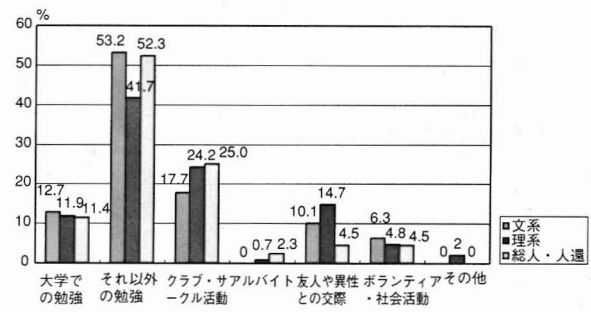


学生にとって大学生活では何が最も重要かを聞いたところ、第1位は大学での勉強であり、78.4%の教官が第1位にあげた。第2位は若干分散したものの「大学の正規の課程以外での勉強（学問）」をあげる教官が43.6%、ついで「クラブ・サークル活動」をあげる教官が23.8%であった。

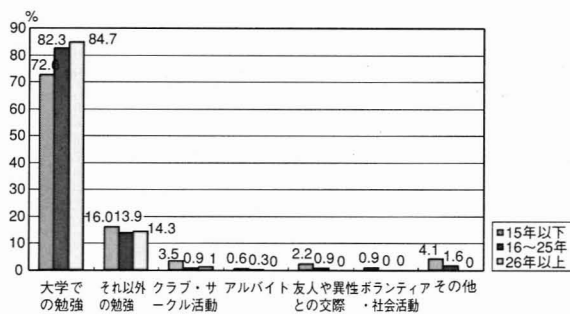
所属別・第1位



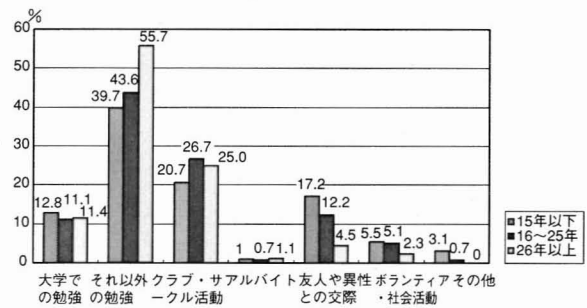
所属別・第2位



教育歴別・第1位



教育歴別・第2位

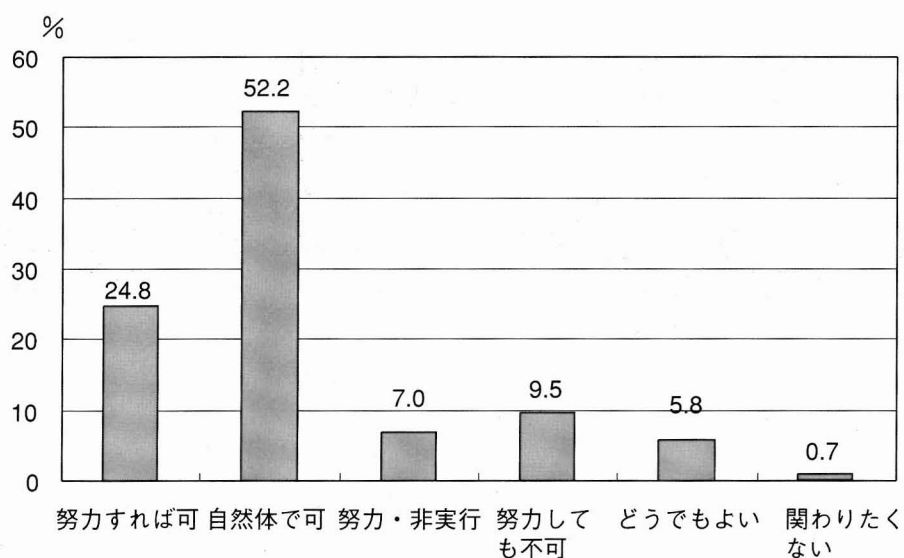


第1位「大学での勉強」との回答は、文系（78.8%）理系（78.2%）にくらべ、総人・人環（87.2%）に多い。第2位「クラブ・サークル活動」または「友人や異性との交際」との回答（のべ）は、文系（27.8）総人・人環（29.5）にくらべ、理系（38.9）に多い。

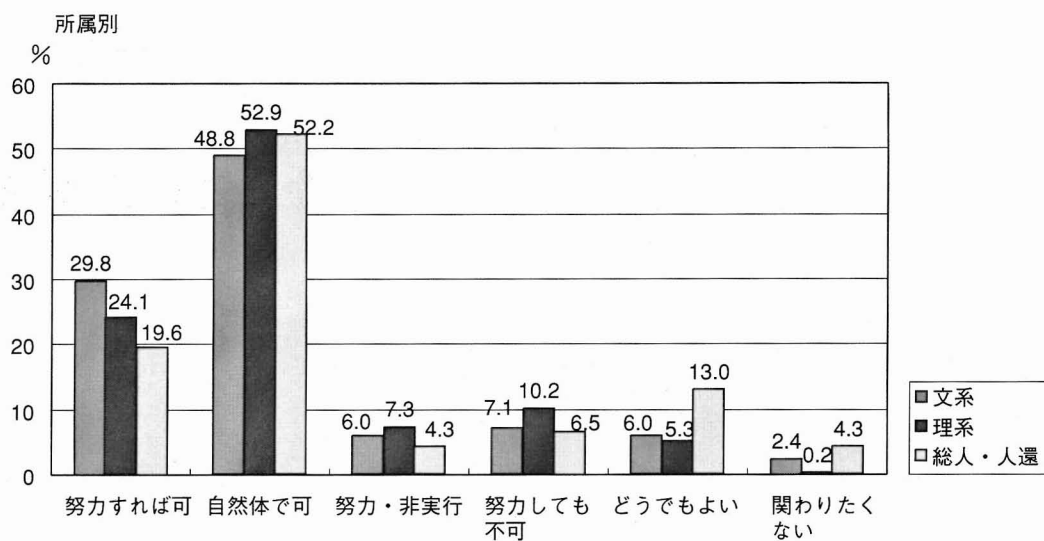
教官の教育歴で見ると、第1位「大学での勉強」との回答は、15年以下（72.6%）16～25年（82.3%）26年以上（84.7%）と教育年数に比例して多くなる。第2位「大学の正規の課程以外での勉強」との回答も同傾向にある（39.7、43.6、55.7）。逆に第2位「友人や異性との交際」との回答は、教育年数に反比例して少なくなる（17.2%、12.2%、4.5%）。

⑦ 学生への接し方

自然体で接していれば良いとされる考える教官が半数以上



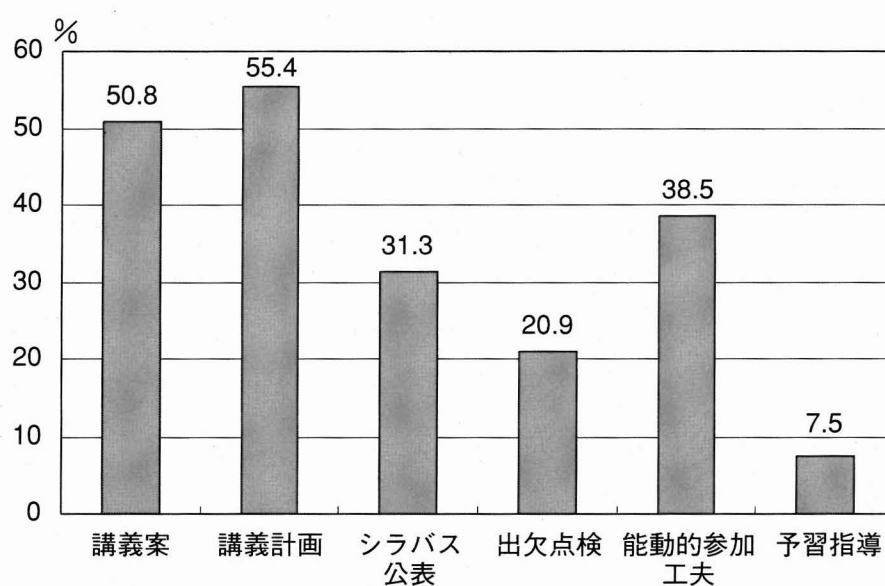
学生との接し方について聞いたところ「自然体で接していれば、自然と学生とは理解しあえる」とする教官が52.2%であり、「努力して接すれば学生と理解しあえると思うし、事実理解しあえている」とする24.8%を併せれば、77.0%の教官が学生とのコミュニケーションを良好だとしている。



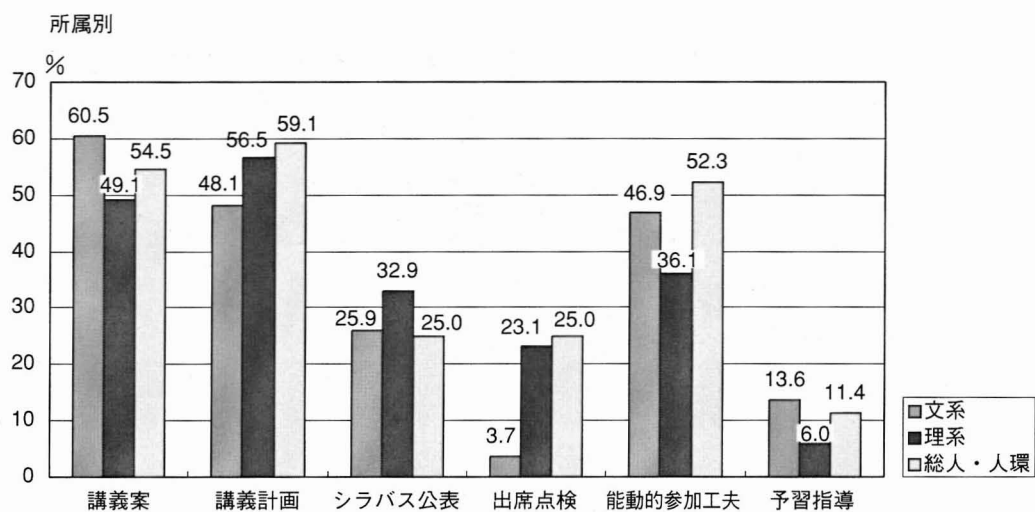
「自然体で接していれば、自然と学生とは理解しあえる」または「努力して接すれば学生と理解しあえると思うし、事実理解しあえている」との良好的回答は、文系（78.6%）理系（77.0%）にくらべ、総人・人環（71.8%）にやや少ない。また「学生と理解しあえても、しあえなくてもどちらでもかまわない」または「学生とはできることなら関わりたくない」との無関心的回答は、文系（8.4%）理系（5.5%）にくらべ、総人・人環（17.3%）に多い。

⑧ 授業についての工夫

講義案（シナリオ）、講義計画を作成している教官が半数以上



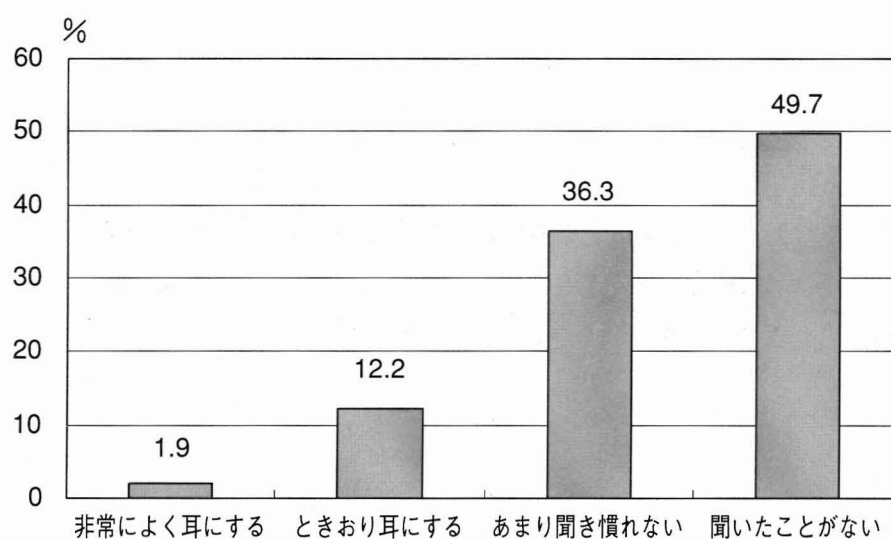
「日々の授業が実り豊かになるため」の工夫を聞いたところ、「年間（半年間）の授業全体の一貫した講義計画の作成」をしている教官が55.4%、「日々の授業についての文書による講義案（シナリオ）の作成」をしている教官が50.8%であり、「学生の授業への能動的参加を促す工夫」をしている教官も38.5%いた。



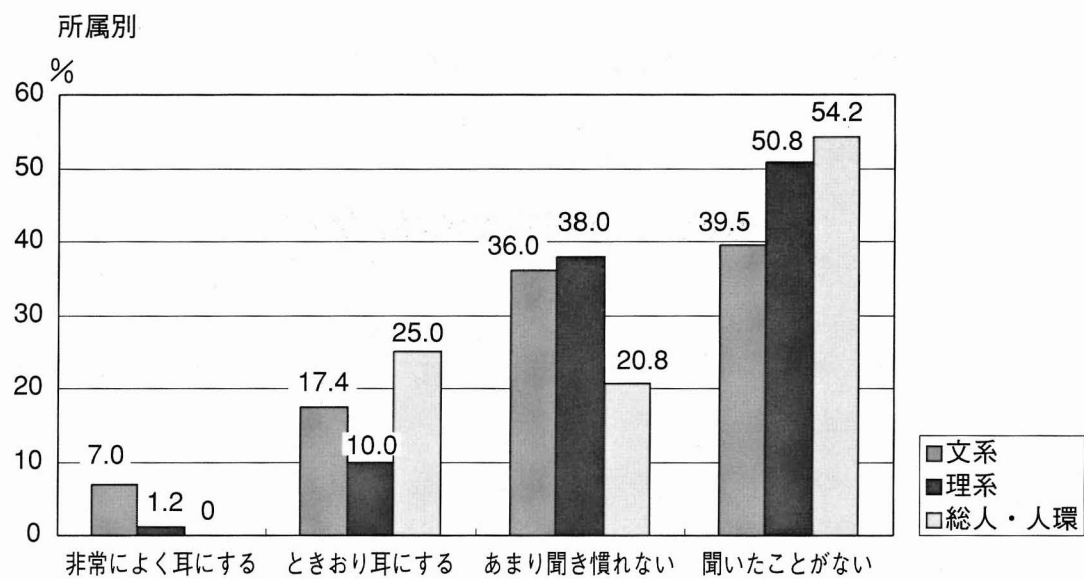
「能動的参加を工夫」または「予習指導」との回答（のべ）は、文系（60.5）総人・人環（63.7）にくらべ、理系（39.1）に少ない。また「出席点検」との回答は、理系（23.1%）総人・人環（25.0%）にくらべ、文系（3.7%）に少ない。

⑨ F Dという言葉聞いたことがありますか？

半数近くの教官が聞いたことが無い



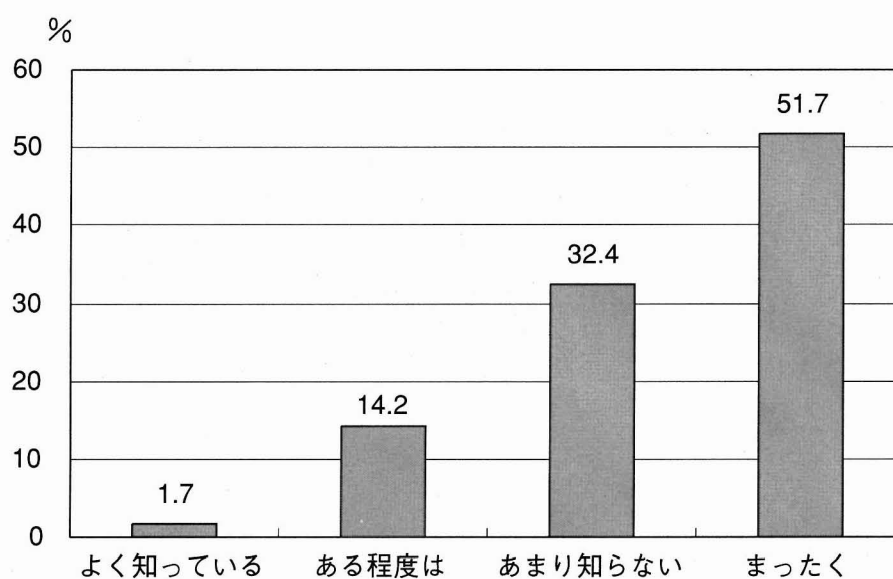
F D（ファカルティ・ディヴェロプメント）という言葉をもの程度耳にするかを聞いたところ、「聞いたことがない」をする教官が49.7%であり、「あまり聞き慣れない」とする36.3%の教官を併せると86.0%の教官にとってF Dという言葉は身近なものとは言えないようである。



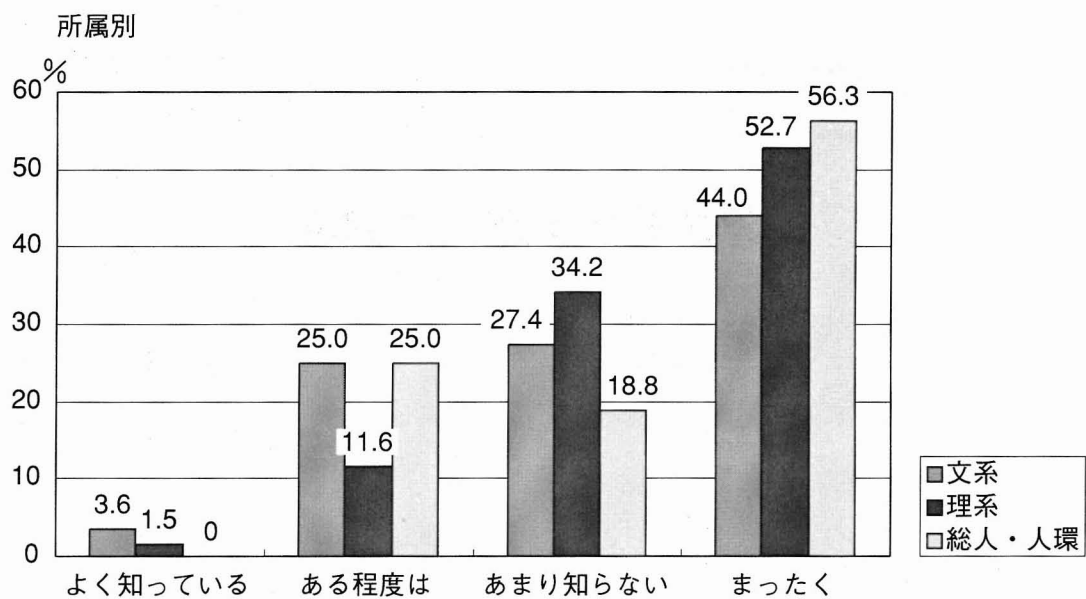
「あまり聞き慣れない」または「聞いたことがない」との否定的回答は、文系（75.5%）総人・人環（75.0%）にくらべ、理系（88.8%）に多い。

⑩ FDという言葉の意味を知っていますか？

8割強の教官は知らない



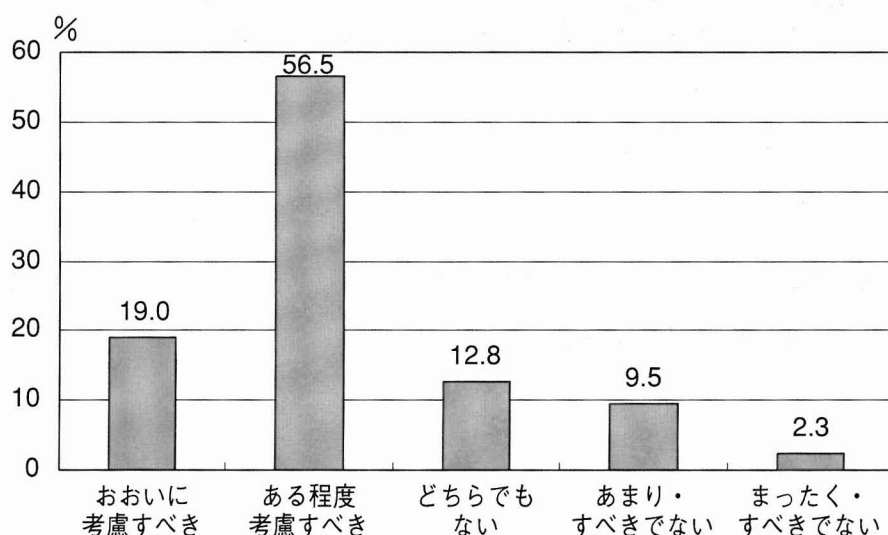
FD（ファカルティ・ディヴェロプメント）の意味を聞いたところ、「まったく」もしくは「あまり」知らないとする教官が、84.1%であった。FDとは、簡単に言えば「教員、もしくは教員団の、主として教育面での能力開発を目的とした研修」であるが、少なくとも言葉としては、本学での認知は低いといえそうである。



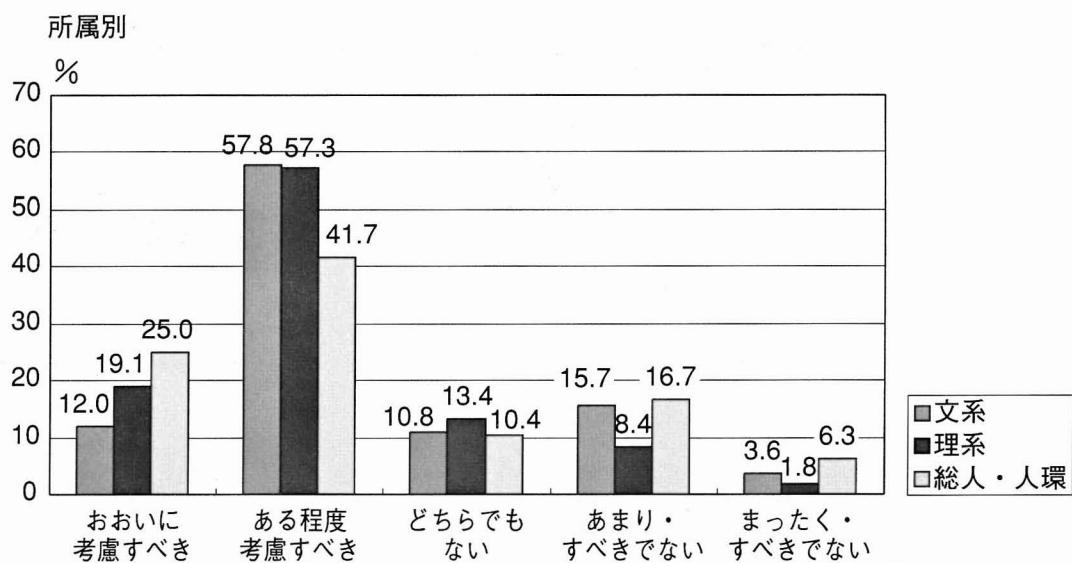
「あまり」または「まったく」知らないとの否定的回答は、文系（71.4％）総人・人環（75.1％）にくらべ、理系（86.9％）に多い。

⑪ 採用・昇進時の教育業績の考慮

考慮すべきが、7割強



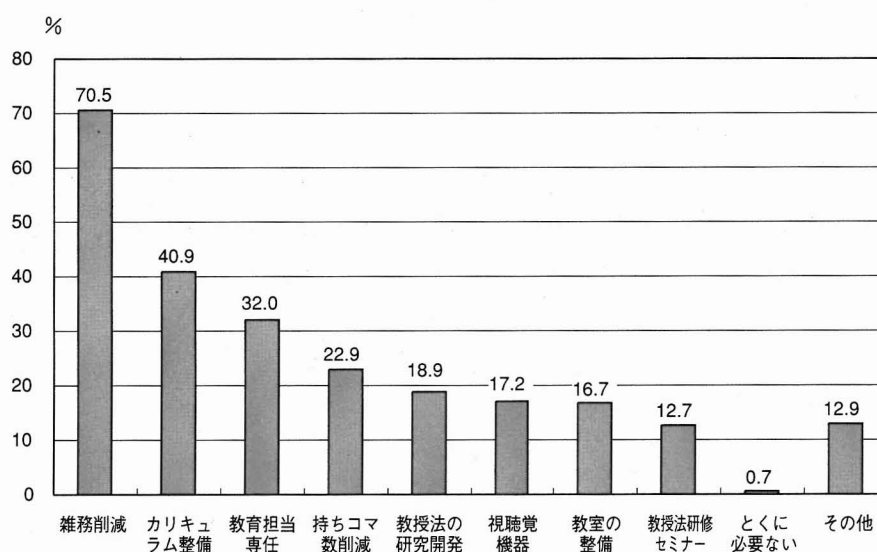
採用、昇進等の際の教官の評価に、教育上の実績を考慮すべきだと思うかを聞いたところ、「おおいに」及び「ある程度」考慮すべきとする答が、75.5%であった。白石データはこの点を採用時と、通常の評価に分けて聞いているが、前者で49.4%、後者で68.5%の教官が考慮すべきとしており、4年前より教育上の実績を考慮すべきとの答が増加している。



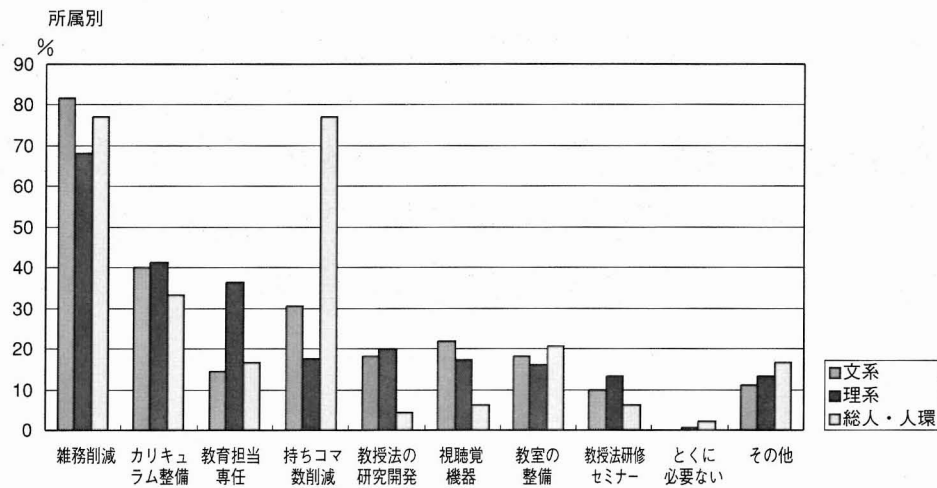
「おおいに」または「ある程度」考慮すべきとの肯定的回答は、文系（69.8%）総人・人環（66.7%）にくらべ、理系（76.4%）に多い。

⑫ 大学教育の改善法

研究、教育外の業務の削減をあげる教官が7割



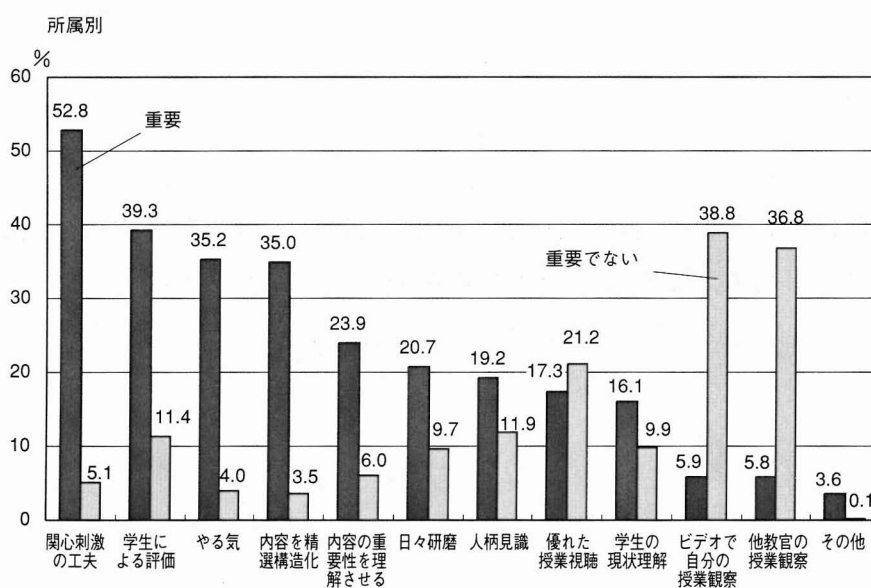
大学教育の改善の方法としての希望を聞いたところ、「研究、教育外の業務の削減」をあげる教官が70.5%であり、カリキュラムの整備をあげる教官が40.9%であった。教育の改善には、相当の時間の充たが必要であることは明らかであり、その前提を整備することが重要なようである。



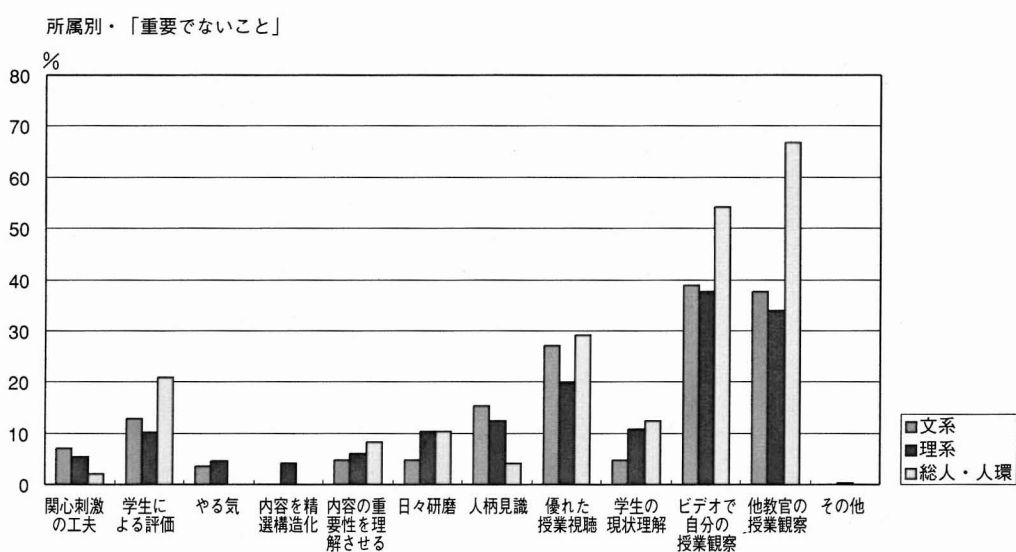
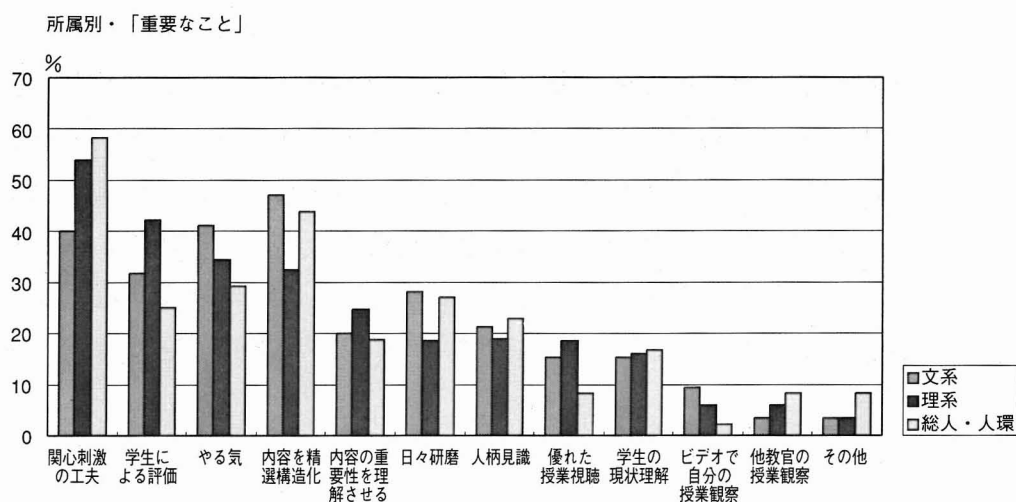
「持ちコマ数削減」との回答は、文系（30.5％）理系（17.6％）総人・人環（77.1％）で顕著な違いがみられる。また「教育担当専任教官の配置」との回答は、文系（14.6％）総人・人環（16.7％）にくらべ、理系（36.3％）に多い。

⑬ 授業改善に重要なこと、重要でないこと

重要なのは、学生の関心・好奇心を刺激するものとなるような工夫、学生の評価に基づく工夫。
重要でないのは、自らの授業の視聴。

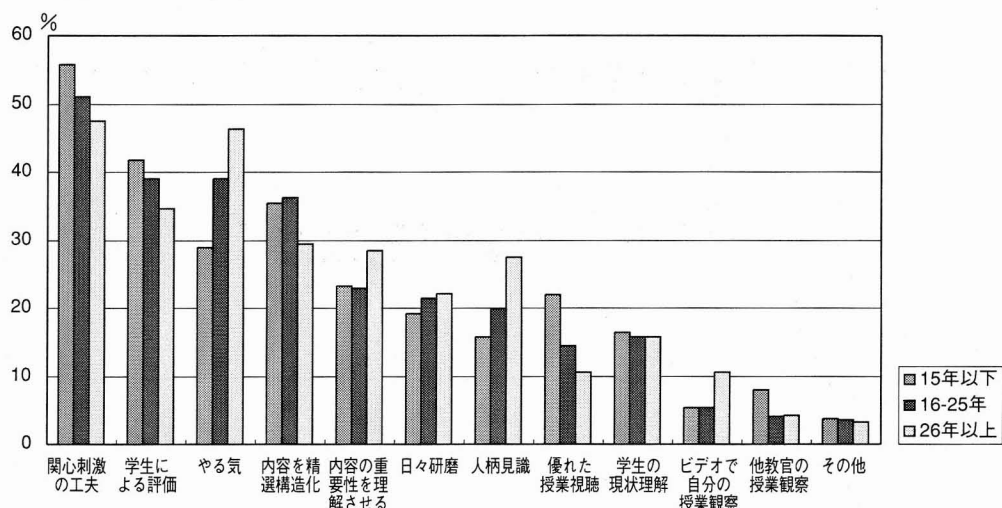


授業改善のために重要だと思うことを聞いたところ、第1位は「学生の関心・好奇心を刺激するものとなるように授業内容を工夫すること」であり、第2位は「授業に関する学生の評価結果を参考にして新たな工夫をすること」、第3位は「授業に対する教官の熱意、気力、やる気を高めること」であった。逆に、重要でないと思うことを聞いたところ、第1位は「ビデオ等によって記録された自らの授業を視聴すること」であり、第2位は「他の教官によって行われる授業を観察すること」、第3位は「優れた授業を視聴すること」であった。授業改善については、未だ、個人的努力に依存する傾向が強いと言えそうである。

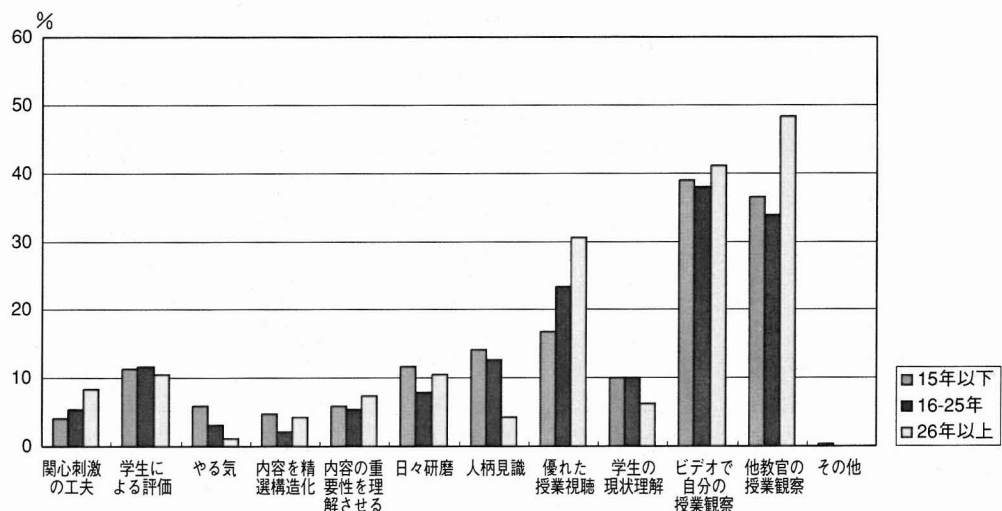


上位の項目でも所属によって違いがみられる。まず重要だと思われるものについて。「学生の関心好奇心を刺激する工夫」との回答は、理系（53.9%）総人・人環（58.3%）にくらべ、文系（40.0%）に少ない。「学生の評価結果を参考」との回答は、文系（31.8%）総人・人環（25.0%）にくらべ、理系（42.2%）に多い。「教官の熱意、気力、やる気」との回答は、文系（41.2%）に多く、総人・人環（29.2%）に少ない。次に重要でないと思われるものについて。「ビデオ等で自らの授業を視聴」および「他の教官の授業を観察」との回答は、文系（38.8%、37.6%）理系（37.6%、33.9%）にくらべ、総人・人環（54.2%、66.7%）に多い。

教育歴別・「重要なこと」



教育歴別・「重要でないこと」

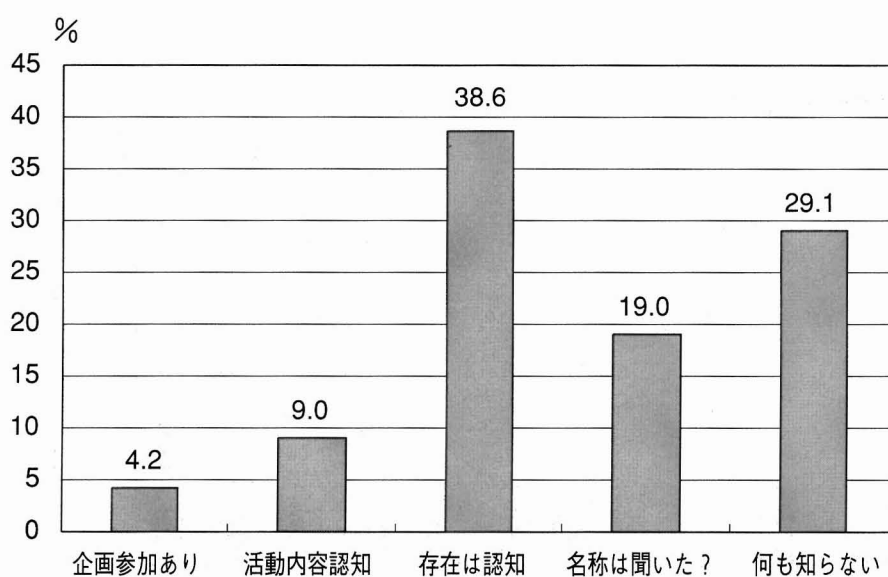


教官の教育歴で見ても興味深い違いがみられる。まず重要だと思われるものについて。「学生の関心好奇心を刺激する工夫」および「学生の評価結果を参考」との回答は、15年以下（55.7%、41.8%）16－25年（51.1%、39.1%）26年以上（47.4%、34.7%）と教育年数に反比例して少なくなる。逆に「教官の熱意、気力、やる気」との回答は、教育年数に比例して多くなる（28.9%、39.1%、46.3%）。次に重要でないと思われるものについて。「他の教官の授業を観察」および「優れた授業を視聴」との回答は、15年以下（36.5%、16.7%）16－25年（33.8%、23.3%）にくらべ、26年以上（48.4%、30.5%）に多い。

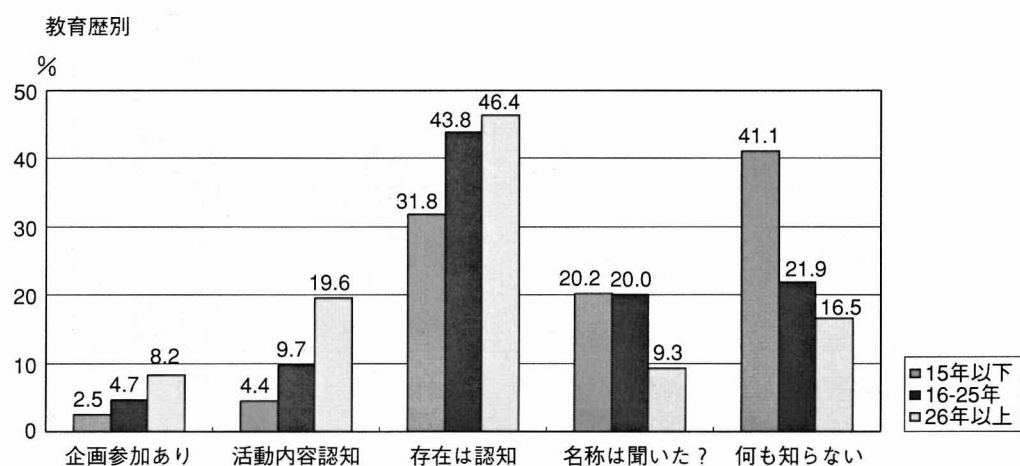
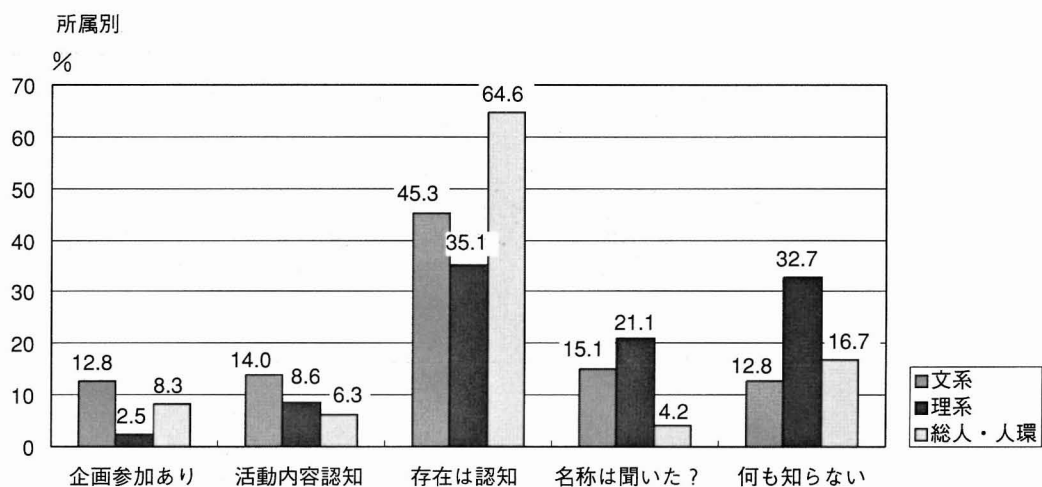
(2) 高等教育教授システム開発センターについて

① センターを知っていますか？

知らない教官が半数近く



学内共同教育研究施設として「高等教育教授システム開発センター」があることについて聞いたところ、存在することは知っているという答にまで広げれば51.8%となる。しかし、大学教育改革フォーラム、公開研究会等の企画に参加したことがある教官、主要な活動内容を知っている教官は、13.2%に留まり、我々として一層の努力が求められている。



「センターの名称を聞いたことがあるような気もする」または「何も知らない」との否定的回答は、文系（27.9％）総人・人環（20.9％）にくらべ、理系（53.8％）に多い。

教官の教育歴で見ると、「センターの名称を聞いたことがあるような気もする」または「何も知らない」との否定的回答は、15年以下（61.3％）16－25年（41.9％）26年以上（25.8％）と教育年数に反比例して少なくなる。逆に「センターの諸企画に参加したことがある」または「主要な活動内容も知っている」との肯定的回答は、教育年数に比例して多くなる（6.9、14.4、27.8）。